

第17回 齋藤秀雄メモリアル基金賞

伊藤 悠貴 氏へ「贈賞にあたって」

堤 剛

伊藤さん、この度は本当におめでとう御座います！この賞に相応しい立派なチェリスト/アーティストだ、と選考委員一同強く推薦させて頂きました。

伊藤さんのチェロ演奏の魅力は何と言っても彼が造り上げる「音」そのものにあると思います。その色彩の多様さ、ダイナミズムとしての音、そして聴く者を惹きつけて止まない本質的な美しさが其処にあります。ラフマニノフの演奏にそれが如実に現れており、伊藤さんがラフマニノフを得意とされる理由も良く解ります。そして英国で学ばれた事もあって英国人作曲家の作品とも積極的に取り組まれ、新しい境地を切り拓いて行くパイオニア的な精神を持ってその啓蒙に務められていらっしゃると思います。中でもF.ブリッジの作品の解釈に抜きん出たものがあるように私は思います。加えてスタンダードレパートリーとされている作品も完全に手中に入れられ、プログラム内容が豊富で密であり、同時に独特の自由さを持った演奏で国際的に活躍されていると思います。

ロンドンを本拠地に活動されておられる故か、演奏を含め様々な面で私達に今までに無いオープンで新しい視点、考え方を提示して呉れますし、伊藤さんの演奏活動全般に対する積極的な姿勢には常常感服致しております。それがまた指揮活動とかラジオ局のパーソナリティーという分野でも成功を収められている理由かとも思います。簡単に言いますとフレキシビリティとかダイヴァーシティに富んでおり、秀でているという事になるのではないのでしょうか。本当に頼もしい限りです。

伊藤さんは人間的にもとても幅広く、音楽だけでなく、全ての面でコスモポリタンな発想をされる方です。若い頃から素晴らしい先生方に恵まれ着実に成長されて来られましたが、其処には様々な苦労や困難もあり、大変な努力と休む事ない精進と研鑽でそれを乗り越えてこられたからこそ、今の姿がある事に疑いの余地がありません。でもそのような苦労などは微塵も感じさせず、演奏をされる時は全てをそれに打ち込み、音楽そのものと一体となっている彼の芸術性は、今後ますます磨かれていってその力を存分に発揮し、真の意味でのインターナショナルアーティストになられる事と確信致しております。

今後はこれまで培ってこられたものを後進の指導にも向けて下さいましたら、偉大な教育者であられた齋藤秀雄先生のレガシーを引き継いで行って頂けるのではないのでしょうか。そしてそれによってこの賞の持つ意義がますますはっきりして来ると思います。

伊藤さんのさらなるご活躍を期待して私からのお祝いのメッセージとさせて頂きます。

第17回 齋藤秀雄メモリアル基金賞

「受賞の言葉」

伊藤 悠貴

この度は名誉ある「齋藤秀雄メモリアル基金賞」を受賞させていただくことになり、賞を与えてくださった小澤征爾先生、堤剛先生、選考委員の先生方、ソニー音楽財団の皆さまに心からの感謝を申し上げます。

20代の最後にこのような大きな賞をいただき、30代に向けて一層身の引き締まる思いです。

私は直接齋藤秀雄先生の教えることは叶いませんでしたが、最初に手ほどきを受けた故山川郁子先生、そして恩師倉田澄子先生から、「基礎は100%完璧でなければならない」、また何よりも「心で歌う」という齋藤先生の教えを受け継ぎました。

また室内楽勉強会で小澤先生から室内楽の重要さ、面白さを学び、マスタークラスでは堤先生にご指導をいただく機会もあり、今振り返ると、私の学んで来た道にはいつも齋藤先生の偉大な教えがありました。

プロのチェリストになると決心した10代半ば以降、英国で練習に励む傍ら、自分が極めるべき道、すべきことは何かを考えてきました。

その過程で、ラフマニノフの音楽が自分にとって最も聴衆とコミュニケーションしたい特別なものとなり、ゲリングス先生やボヤルスキー先生からロシア音楽の底に流れる情念や作曲家自身の言葉などについて深く学びました。今では、これまでになかった新しい「ラフマニノフ音楽のスペシャリスト」としてラフマニノフ作品の研究を続けてゆくことを、自分の演奏活動の一つの核にしたいと思っています。また、これまで人生の半分ずつを過ごした日本と英国の文化的架け橋を目指して、英国のチェロ作品の素晴らしさを日本で広めることも大切にしたいと考えます。

数年前からチェリストとしてだけでなく指揮者としての道も探究し活動していますが、これからも分野に囚われず、私が「音楽人」としてできること全てに挑戦し続けたいと思います。

ご指導いただいた先生方、演奏を聴いてくださる全ての方、共演者、所属事務所、後援会、発信拠点のラジオ局、名器を貸与してくださった方、関係者の皆さま、そしていつも支えてくれる家族や大切な人、友人、本当に多くの方々のおかげで演奏活動ができていることを改めて思い、感謝の気持ちで一杯です。

AI、IoTの普及など世の中は激しく変化していますが、こうした時こそ小澤先生が仰ってこられた「共生感」が社会で強く求められるのだらうと思います。クラシック音楽はこれからの社会に何ができるのか、我々若手の責任は大変重いですが、また多くの可能性があると感じます。

ご指導をいただきながら、万里一空の努力を重ねて参ります。